掃除成兼可申候、如何可仕と、とり〳〵より〳〵申候、然處信綱公被爲聞、道幅に筵を敷かせ置、降溜たる雪を筵儘運取、新敷筵を敷替候へと、御下知に而悉事調申由也、

〔北越雪譜初編上〕雪を掃ふ　雪を掃ふは落花をはらふに對して、風雅の一とし、和漢の吟咏あまた見えたれども、かゝる大雪をはらふは風雅の狀にあらず、初雪の積りたるを、そのまゝにおけば再び下る雪を添へて、一丈にあまる事もあれば、一度降ば一度拂ふ、雪淺ければ、の、ふるをまつ、是を里言に雪掘といふ、土を掘がごとくするゆゑに斯いふ也、掘ざれば家の用路を塞ぎ、人家を埋て人の出べき處もなく、力强家も幾万斤の雪の重量に、推碎んをおそるゝゆゑ、家として雪を掘ざるはなし、掘るには木にて作りたる鋤を用ふ、里言にこすきといふ、則木鋤也、榻といふ木をもつて作る、木質輕强して折る事なく且輕し、形は鋤に似て刃廣し、雪中第一の用具なれば、山中の人これを作りて里に賣、家毎に貯ざるはなし、雪を掘る狀態は圖にあらはしたるが如し、○圖略　掘たる雪は空地の人に妨なき處へ、山のごとく積上る、これを里言に掘揚といふ、大家は家夫を盡して、力たらざれば掘夫を傭ひ、幾十人の力を併て一時に掘盡す、事を急に爲すは、掘る内にも大雪下れば、立地に堆く、人力におよばざるゆゑ也、掘る處、圖には人數を略してゑがけり、右は大家の事をいふ、小家の貧しきは掘夫をやとふべきも費あれば、男女をいはず一家雪をほる、吾里にかぎらず雪ふかき處は皆然なり、此雪いくばくの力をつひやし、いくばくの錢を費し、終日ほりたる跡へ、その夜大雪降り夜明て見れば元のごとし、かゝる時は主人はさら也、下人も頭を低て歎息をつくのみ也、大低雪ふるごとに掘ゆゑに、里言に一番掘二番掘といふ、

〔萬葉集三雜歌〕登筑波岳丹比眞人國人作歌一首幷短歌

雞之鳴東國爾高山者左波爾雖有○中略不見而往者益而戀石見雪消爲山道尙矣名積敍吾來前二

〔萬葉集略解三下〕前二は並ニの誤り、四の義をもてかけり、

雪消